

本が難しくて、「アイデンティティ」「ナラティブ」など、その言葉の意味だけでも理解が進み、今から読むのに少しハードルが下がりました。もう一度挑戦したいと思います。保育園で子どもたちが遊ぶ様子を写真とコメントで掲示しているのですが、子どもたちが楽しそうに出来事を言葉や態度でお家の人に伝える様子があり、改めて子どもたちがどう感じていたか、何が印象に残っているのか、実践の振り返りをしつつ姿を見えています。子どものアイデンティティが作られてどうということなのか、自分の実践の中でも意識を持ちたいと思いました。

ひとなる書房さんの今回のおしらせを一目見たときに、子どもに対しアイデンティティという言葉を使うことにちょっとした衝撃を受けました。日本の保育、教育、子育ての中では、尊重という概念はあるにしても、幼少期の子どもに対してアイデンティティの構築を模索していくことがまったく新しい概念として感じられました。実際に保育を研修する立場からすると、多様性の認識、尊重とそこからの自主性・主体性の理解において日本の現状の保育現場は大変大きな垣根をもっているのを感じます。この点、世界と日本の保育観、子ども観の大きなギャップを感じずにはられません。さらに研鑽を深めていきたいと思います。